

建築とまちづくり

No.532

2023年7/8月号

特集

地域特集・静岡 大地と水が作り出す地域文化

02

「居住福祉」の諸相
(7)

高齢者の居住を
支える木造民家

岡本 祥浩

04

主張

人生と都市

乾 康代

村田 雄剛

06

安倍川と人々

——静岡市街地の形成

福世 義己

10

南海トラフ地震（東海地震）への備え
——静岡県での地震防災対策について

30

構造設計の楽しみ

(4)

構造の神も
細部に宿る

松島 洋介

早津 和之

防災先進県として木造住宅の倒壊ゼロを目指して、
プロジェクト「TOUKAI-0」を展開

32

研究会だより

新建マンションサポート研究会 2022年取り組み2題

山下 千佳

子ども環境研究会第7回報告 ふくふくの会

日黒 悦子

環境と建築研究会第3回報告 福岡県の気候風土適応住宅

永井 幸

林 克

18

命の水と環境を壊すリニア新幹線

36

鎌田一夫さんを

偲ぶ

桜井 郁子

23

大井川と世界農業遺産「茶草場農法」

石川 茜

26

「足久保からお茶をつなげていく」
茶畑のある景色・暮らしを未来へ

41

新建のひろば

福岡支部——第6回「仕事を語る会」

京都支部——4月の企画二題

大阪支部——「中之島を緑の島に～「どうする中之島」「どうする都市公園」「どうする未来」提案展

45

私のまちの
隠れた名建築

(18)

尾県郷土資料館
山梨県都留市

安藤 周春

(表紙写真)

掛川市・東山の茶畑

桜井 郁子

(扉写真)

高田 桂子

原発推進等5法が可決・成立
福島事故の教訓踏みにじる暴挙
川本雅樹

福島第一原発事故の教訓に反し、原発推進等5法（原子力基本法「原子炉等規制法」「電気事業法」「再処理法」「再生可能エネルギー特措法」）が5月31日、参院本会議で、自民・公明・維新・国民などの賛成で可決・成立した。原発事故から12年たった今でも、原子力緊急事態宣言が解除されず、8万人を超える人々が故郷に戻ることができていない。第一原発の施設も原子炉内の深刻な実態があらわになり、事故の収束は見通せない。増え続ける汚染水も大問題だ。この深刻な事故をうけて、原子力規制委員会が設置され、「運転期間は原則40年、例外的に一度に限り20年延長できる」と原子炉等規制法が改正された。ところが、今回の改正で、運転期間を制限する条文を削除し、所管を推進側の経済産業省の電気事業法に移し、経産相の認可で20年以上の延長を可能とし、延長回数もなくなった。

これまで政府は、原発の依存度は低減する、新増設は想定していないと述べてきたが、今回の改正は180度変えるものだ。十分な議論もなく、国民を置き去りに安全を無視した政策転換をする政府に怒りを覚える。電力の安定供給と脱炭素のためには、省エネルギーの徹底と再生可能エネルギーの本格的普及こそ必要だ。

(御所市議会議員)

乾康代

元茨城大学教授／新建全国代表幹事

ミア・ハンセンリラブ監督の「それでも私は生きていく」(2022年)が公開中だ。第75回カンヌ国際映画祭、ヨーロッパ・シネマ・レーベル受賞作品。

人は生まれて成長し、恋をして、家族をつくり、老い、別れる。人は自分を生きるが、恋人や家族とともにいくつも的人生も生きる。それが人生だ。

主人公サンドラは、夫を亡くした後、通訳の仕事しながら、パリのアパートで8歳の娘リンと暮らしている。老いた父は、近くのアパートに一人住みだが、病を患って記憶も視力も衰えつつある。今も教え子から慕われる哲学教師だった最愛の父。父の部屋は壁一面を哲学書が埋めている。これらの書物は彼の人生そのものだ。しかし、忍び寄る老いと病が、父の確かに豊かだった人生を奪いつつある。サンドラは、母、姉とともに書物を処分して、父の大切な居場所から彼を引き剥がし施設に入れる辛い決断をする。

他方で、サンドラは、町で、宇宙化学者で旧知のクレマンと偶然再会し、恋に落ちる。クレマンとの恋は、幸せで充実した日々を与えてくれるが、クレマンには妻と息子がいる。彼は、新しい恋を秘めたままにしていることに耐えられず、妻に告白してしまう。

ラブ監督は、クレマンの二股の苦しみを後追いつせず、夫に怒った妻を登場させもしない。ただ、サンドラの不安な心だけを深く描く。通訳の仕事で、クレマンから週末は会えないというメールを受け取って平静を失い、公園の池のボートの中では、向かい合うクレマンに「私って幸せ？」と質問、彼の「すごく幸せさ」という答えを確認しないではいられない。

終わろうとする父の人生と向き合い、その一方で、喜びと充実の絶頂にあるサンドラ。人生の山頂と谷底を見つめながら、物語の最後、サンドラは、娘のリン、クレマンと、パリの市街を一望するモンマルトルの丘に立つ。クレマンは、サンドラの背にそつと手を伸ばす。

物語は、パリの街角で、父の教え子から「先生の娘さんですよ」と声をかけられる場面から始まり、モンマルトルの丘で終わった。

サンドラを演じたレア・セドゥは最新作007で演じたボンドガールとは打って変わって、ベリーショートにスッピン。彼女の人生は、見た目のような明るく軽やかなものではなく、辛くも重くもある。その飾り気のないスッピンさで、彼女の深い悲しみや喜びがてらうことなく描かれる。

この映画は、ラブ監督自身の経験が下敷きだと

いう。シングルマザーに、仕事、老親の介護、秘めた恋。サンドラは私だ！この映画を観て自分の人生を重ねた女性は多いのではないだろうか。私もその一人だ。大きな都市の中の小さな物語だけれど、確かな普遍性がある。

舞台はパリの街中。サンドラの住まいはパリの小さなアパート。クレマンとのデートは美術館や公園、池、モンマルトルの丘である。きつと敢えてだろう、華やかな商業施設や大規模な建築は使われず、ここはパリだ、と誇示するような歴史的建造物も象徴的な場所も出てこない。それらが、背景に映されることもない。登場人物の身近な生活の場とその近景だけだ。

遠景が使われたのはただ一カ所、ラストシーンで、モンマルトルの丘に立った二人がパリの市街地を望んだ時だ。しかし、二人が眼下に眺めるパリは、どこまでも広く望洋としている。人生は、先を見通せない、そしてこの先も続く。「それでも私は生きていく」。

私は水戸に住んでいる。もし、私が映画監督で、日本のサンドラとクレマンを水戸で撮影するとすれば、水戸のどの空間や施設を使うだろうか。いろいろ考えてみる。都市は市民のもの、市民の生活の場だ。そんな人生と都市の映画をまた観たい。